

赤十字NEWS

April 2016 Vol.911
http://www.jrc.or.jp



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



私たちは、忘れない。 全国から 被災地へエール

「一人じゃない。みんなが応援しています」「赤十字は皆さんの味方です！」—日本赤十字社は東日本大震災から5年目の今年3月、全国から被災地への応援メッセージを集めた「寄せ書きフラッグ」を岩手、宮城、福島の前被災3県に届けました。メッセージは、被災地での救護に携った職員や奉仕団員、一般市民によるもの。各被災地の震災イベント会場や公共施設、仮設住宅などに掲示されました。被災地からは「今でもこんなにやってくれたんだねえ」「すごいね。日本中から…うれしいねえ」「皆に見えるところに張っておくべ」などの笑顔と感謝が寄せられています。

富山県支部から届いた「私たちは、忘れない。」の「寄せ書きフラッグ」を受け取った陸前高田市高田一中仮設住宅の皆さん

CONTENTS

TOPICS

2 杉並区立三谷小学校で
防災授業実施
5年ぶり「蘇生ガイドライン」
改訂
第4回赤十字原子力災害セミナー
健康豆知識
睡眠時無呼吸症候群

TOPICS

3 平成28年度
日本赤十字社の
予算概要
常任理事会開催報告
理事会開催報告
第87回
代議員会審議結果公告

SPECIAL

4 美味しい！温かい！
赤十字奉仕団の十八番
炊き出しは「食」を通じた
災害救護活動です

AREA NEWS

5 全国の赤十字が 賛助企業が
「私たちは、忘れない。」
未来につなげる
復興支援プロジェクト
岐阜・山口・沖縄・広島・鳥取
「被災者の痛みを心に留め、
引きずっていきたくない」
ジャーナリスト 由井りょう子さん
Voice&プレゼント

WORLD

6 7 ネパール地震災害
復興支援
学校再建に向け
現地調査
ミニシリーズ
先人たちの語る赤十字
ジョン・F・ケネディ



今月の出会い



森ビル株式会社
タウンマネジメント事業部
松本 栄二さん

安全・安心は街づくりの基本です

「東京を世界一の都市にする。そのためには、磁力ある都市づくりが必要だ、という思想が明確な会社です」。自社の魅力をこう語るのは、東京・港区を中心に大規模複合都市開発を手掛ける森ビル株式会社の松本栄二さん。「安全、環境、文化の3点が街づくりの重点テーマ。たとえば森美術館は、文化都心をコンセプトに誕生した六本木ヒルズのシンボルになっています」

「逃げ出す街から逃げ込める街へ」をコンセプトに、災害対策にも力を入れている同社。震度5強以上の地震の際には、1300人の社員全員が同社の定める震災対策組織体制に入ること。そのための訓練も重ねています。松本さんは「東京五輪に向けて、訪

日外国人が増える中、日本語が分からない皆さんに災害時の情報をどう届けていくのかについても、準備を進めています」と取り組みを説明します。

5月の赤十字運動月間。全国のさまざまな建物を赤でライトアップする日赤初のイベントには六本木ヒルズや虎ノ門ヒルズなど同社ビルも参加。東京の空を赤十字色に彩ります。「日赤さんには海外人道支援など外交の役割も担っていただいている。一国民として感謝しながら、協力をさせていただきます」

PROFILE

1988年早稲田大学理工学部卒。大手建設会社を経て、1999年森ビル入社。営業本部マーケティング室部長、都市開発本部施設設計画部担当部長などを歴任し、2015年からタウンマネジメント事業部部長。六本木ヒルズ、アークヒルズ、虎ノ門ヒルズとその周辺エリアを含む街の運営をマネジメントする立場から魅力ある街づくりに取り組んでいる。

「まもるいのちひろめるぼうさい」

杉並区立三谷小学校で防災授業

すざろくで

災害時のリアルを体験



青少年赤十字(JRC)の防災教育事業「まもるいのちひろめるぼうさい」のプログラムを活用した防災授業が全国の小・中・高校に広がっています。3月11日には、東京都杉並区立三谷小学校の6年生児童を対象に日本赤十字社本社の職員が授業を行いました。



震災をよりリアルに感じてもらうため授業では、首都直下地震が今後30年以内に発生する確率が70%に達し、最大震度は6弱が想定されることなどの情報も

「まもるいのちひろめるぼうさい」の関連教材として作られた「いえまですごろく」も活用されました。被災した外出先から自宅までのマスに記された情報や課題を通じて、災害時に必要な行動を楽しく、短時間で学べるのが特徴です。



子どもたちは4~6人のグループごとにサイコロを振ってスタート。災害伝言ダイヤルの使い方を学んだり、救助を求める人やハブニングへの対応を考えながら自宅を目指します

迷ったら心肺蘇生を即実行!

5年ぶりに「蘇生ガイドライン」が改訂

7月から新たな赤十字救急法と幼児安全法を開始

日本蘇生協議会(日本赤十字社も参加)が昨年10月、心停止の判断に迷っても直ちに心肺蘇生とAED(自動体外式除細動器)使用を開始することなどを重点とする「蘇生ガイドライン2015」を発表。それに伴い日赤は、救急法基礎講習と幼児安全法の教本・講習内容の改訂、講師研修などを進めています。新しいガイドラインに対応した講習は今年7月から全国一斉に始まりま

蘇生ガイドライン2015は、国際蘇生連絡委員会が公表した「心肺蘇生に関わる科学的根拠と治療勧告コンセンサス」に沿ったもの。一次救命処置をいち早く始められるよう、迷った際にも直ちに心肺蘇生を行うことを強調しているほか、入浴関連死や運動中の心停止、小児の事故防止などの予防についても重点が置かれています。また、良質な心肺蘇生を行うため、胸骨圧迫の深さとテンポを適切に保つ



基礎講習と幼児安全法教本の改訂項目などの周知を図るとともに、ガイドライン改訂で一次救命処置の編集を担当した帝京大学医学部救急医学講座の坂本哲也主任教授(赤十字救急法研究会委員)に講演をいただきました。

第4回赤十字原子力災害セミナー

「私たちは忘れない。福島から学ぶ」

『未来の災害当事者としてできること』

福島の現実踏まえ若者同士で議論

福島県の被災者が置かれている厳しい現実への理解を深めた上で、将来の災害に備えるため今私たちに何ができるのかを考えていくことなどを目的にした第4回赤十字原子力災害セミナーが3月19日、都内で開催されました。主催は赤十字原子力災害情報センター。各地域の青年赤十字奉仕団員や大学生、高校生などを中心に36人が参加し、災害に強い地域へ向けたコミュニ

ティー活性化の方法などについて議論を深めました。セミナー冒頭の講演では、福島大学つくしまふくしま未来支援センターの客員准教授を務める天野和彦さんが、福島で多発する震災関連死(孤独死など)や県外避難の子どもたちに目立つ「生きる力の低下」などを指摘。「災害で問題が顕在化した、全国の地域も同じ課題を抱えている。人と人がつながる仕組みが求め

られている」と問題提起されました。グループに分かれたワークショップでは「近所との付き合いが希薄なのが東京」「私自身隣の人の顔も名前も知らない」「居住地外で災害に遭うことも多いはず」など参加者同士で意見を交換。こうした議論を踏まえた上で、各グループからは「楽しい防災訓練で参加者を増やして強める」などの具体的なプランが出されました。



「孤独死を防ぐために高齢者同士の連絡網を地域に」「住民がつながるための情報発信をSNSなどを通じて強める」などの具体的なプランが出されました。

知って良かった! 日赤のドクター&ナースが教える健康豆知識

⑳ 睡眠時無呼吸症候群—放置すれば死を招くことも 日本赤十字社 長崎原爆諫早病院 福島喜代康 副院長・呼吸器科部長

イビキをかいていると指摘された。朝起きた時に熟睡感がなかったり、頭が痛むことがある。いつも眠く、体がだるい—こんな症状がよくあるという方は、睡眠時無呼吸症候群(SAS)という病気かもしれません。居眠り運転による事故など生活に重大な支障を及ぼしたり、深刻な合併症を招くケースもあります。必ず専門医の診察を受けてください。

SASは、睡眠中に10秒以上の無呼吸が一晚30回以上、または1時間に5回以上発生する状態。睡眠中に舌が喉の奥に落ち込み、口の中の気道を塞いでしまうのが原因です。この気道が狭くなった時の呼吸で発生するのがイビキです。習慣性のイビキ持ちの方の1~2割

がSASだといわれています。

呼吸が止まる度に脳が覚醒してしまうので、深い眠りを得ることができません。そのため睡眠で疲れが取れず、昼間も眠い状態が続いてしまいます。また無呼吸による酸欠状態は、心臓や血管に負担をかけ、心筋梗塞や脳卒中などを引き起こします。メタボリックシンドロームとも関係していて、高血圧や糖尿病を併発する人も目立ちます。SASの重症度が中等以上(1時間あたり20回以上の無呼吸・低呼吸)の方で治療をまったくしない場合、7年後に37%が亡くなっていたというデータも出されているほど合併症の点でもSASは深刻です。

予防の基本は、生活習慣の改善です。首回りの脂肪は

气道をふさぐ一因にもなるので、肥満防止が大切。アルコールの影響で、就寝中の舌が喉の奥におちこみやすくなるので飲酒も控えめにしましょう。

治療は重症度によって異なります。中等~重症の方は、就寝時に装着した鼻マスクから機器を使って空気を気道に送り込み、気道を広げる治療を受けます。一方、軽症の場合は、就寝時にマウスピースをはめ、気道を広げることが取られています。

SASは、自分では気づきにくい病気です。自宅で就寝中に使える簡易検査器具もありますので、少しでも疑わしい症状があれば迷わず病院を受診し、検査を受けるようにしてください。



▲仰向けの就寝姿勢は、気道が舌でふさがれやすくなります。気道にすき間がでやすい横向きの就寝姿勢も予防には効果的です

日本赤十字社
長崎原爆諫早病院
〒859-0497 長崎県
諫早市多良見町化屋986-2
TEL 0957-43-2111 (代表)

平成28年度 日本赤十字社の予算概要

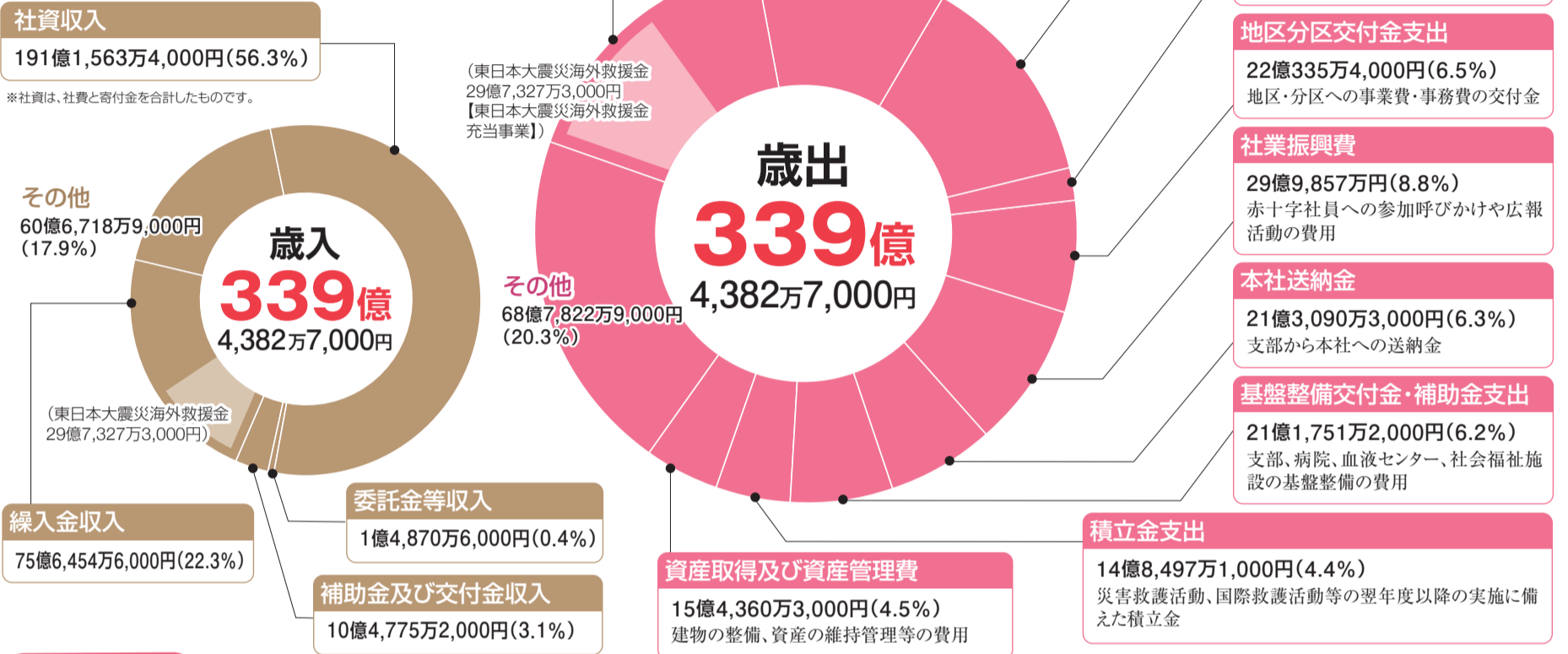
日本赤十字社では、一般会計のほか、医療、血液、社会福祉の3つの事業にかかる特別会計を設けています。以下に平成28年度事業計画に基づく各会計の予算概要を報告します。各予算内容の詳細については、日本赤十字社のホームページ(<http://www.jrc.or.jp>)もしくは本社・支部でご覧いただけます。

※各合計額には、本社・支部・施設間の内部取引額を含んでいます(血液事業特別会計を除く)。

一般会計

本社及び47都道府県支部において、個人・法人の皆さまからの社費(会費)及び寄付金を主な財源に、国際活動、災害救護、救急法等講習会、青少年赤十字やボランティアの活動など、本社・支部の事業にかかる歳入歳出予算をまとめたものです。

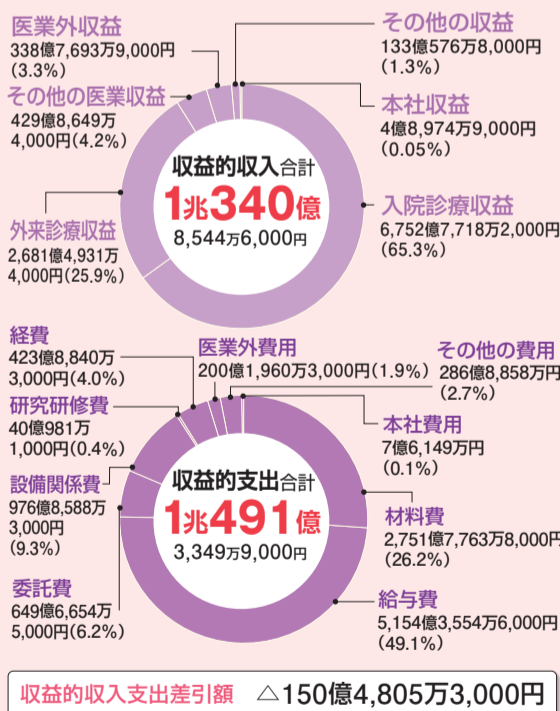
※東日本大震災義援金にかかる歳入歳出予算は、含まれておりません。



特別会計

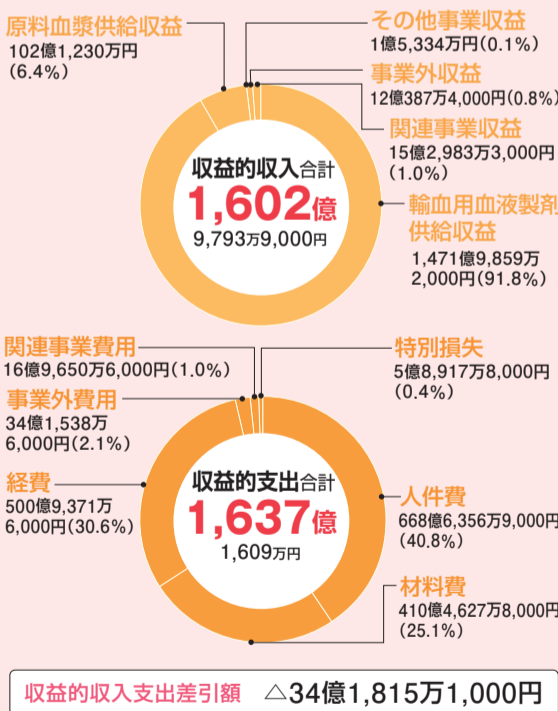
医療施設特別会計

医療施設の運営等にかかる予算をまとめたもので、赤十字病院等医療施設の診療収入を主な財源として、医療施設運営のための費用等に充てられます。



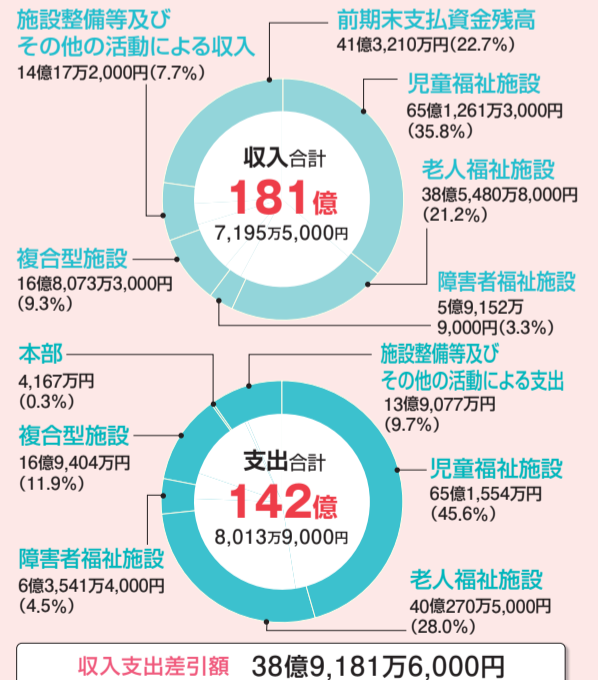
血液事業特別会計

血液事業の推進にかかる予算をまとめたもので、血液製剤供給収益を主な財源として、安全な血液製剤供給のための費用等に充てられます。



社会福祉特別会計

社会福祉施設の運営等にかかる予算をまとめたもので、措置費、委託費、介護保険、自立支援費、診療収入及び都道府県・市町村からの補助金を主な財源として、社会福祉施設運営のための費用に充てられます。



第87回代議員会審議結果公告

平成28年3月18日、新設が関ビル本社協賛・瀧尾ホールにおいて開催された第87回代議員会における審議結果は左記のとおりです。

平成28年4月1日 日本赤十字社 記

第1号議案 社員制度の見直し及び日本赤十字社定款の一部変更について

第2号議案 役員選出について

理事33名及び監事1名が次のとおり選出されました。

理事	池上 清子	渡 文明	川西 智子	林 幸男	久保 恵子	加藤 博美	三浦 宏	遠藤 栄次郎	小嶋 進	田中 正
監事	藤田 伍	古川 武弘	富脇 雅也	加藤 秀郎	丸山 浩一	金丸 康信	牛場まり子	中山 光江	平松 博一	中島 博
監事	藤田 伍	古川 武弘	富脇 雅也	加藤 秀郎	丸山 浩一	金丸 康信	牛場まり子	中山 光江	平松 博一	中島 博

第3号議案 平成28年度事業計画について

第4号議案 平成28年度収支予算について

原案のとおり議決されました。

理事会開催報告

平成28年3月18日、全国社会福祉協議会協議室新設が関ビルにおいて平成27年度3回目の理事会が開催されました。

審議結果は左記のとおりです。

記

1 社員制度の見直し及び日本赤十字社定款の一部変更について

2 医療事業推進本部制の導入及び関係規則の改正について

3 本社組織の見直し及び関係規則の改正について

4 役員選出について

5 平成28年度事業計画及び収支予算について

6 資金の借入について

また、東日本大震災5年日本赤十字社の取り組み、過去から学び未来を拓く、及び社長委任事項の決定状況について、それぞれ報告されました。

審議の結果、いずれも原案のとおり議決されました。

(芳賀赤十字病院の新築工事及び高松赤十字病院の増改築工事にかかる資金の借入)

また、特別養護老人ホーム日赤養護荘の施設整備計画、多様な社会福祉への取り組み及び予算の補正にかかる2月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

常任理事会開催報告

平成28年3月17日、本社において平成27年度第11回の常任理事会が開催されました。

議する事項については、原案のとおり本年3月18日開催の理事会に付議することが了承されました。

また、特別養護老人ホーム日赤養護荘の施設整備計画、多様な社会福祉への取り組み及び予算の補正にかかる2月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

災害時の炊き出しを担うのは、多くの場合被災地やその近隣の奉仕団。行政や社会福祉協議会などからの要請のほか、自主的に“出動”しています。5年前の東日本大震災では、会津若松市女子赤十字奉仕団が1カ月にわたり毎日300食の炊き出しを継続するなど、13県の奉仕団が炊き出しを実施。数多くの被災者の避難所生活を支えました。各地域の奉仕団では、訓練や研修を定期的に行うなど、災害本番に備えています。

昨年9月台風18号の災害時。豚汁などの炊き出しを行いました。

「とてもおいしい。避難所でこういう温かい物を食べられたらほっとしますね。」

地域のために年に約6回炊き出し訓練を行っています。

炊き出し訓練でおしるこを試食

磐田市赤十字奉仕団（静岡県・訓練）

小松島市赤十字奉仕団（徳島県・訓練）

美味しいという言葉と喜ぶ笑顔をいただくとやりがいを感じます。

包装食袋（高密度ポリエチレンの袋など）で米を炊いたり、蒸しパンもできます。

美味しい！
温かい！

赤十字奉仕団の十八番 炊き出しは「食」を通じた 災害救護活動です！

「非常食ばかりが続いていたので、作りたてはありがたかった」「温かい食べ物に心も体もホッとしました」—災害時の避難所生活を支える炊き出しは、全国の赤十字奉仕団の代表的な活動の一つ。炊き出しの温かな料理は、被災者を元気づける大きな役割を果たすとともに、ときには救助活動などにあたる救援者

も支えます。各奉仕団では、より手軽で美味しい炊き出しメニューも次々に開発中です。こうした成果の共有へ、日本赤十字社はこのほど「赤十字奉仕団 災害時炊き出しレシピ集」を奉仕団向けに発行。奉仕団の被災者支援に対する意識を高め、活動活性化につながることを期待されています。

救助活動支えた1日800食の炊き出し（栗原市栗駒赤十字奉仕団・宮城県）

平成20年6月14日の岩手・宮城内陸地震では、被災地の奉仕団による炊き出しなどが、救助活動の隊員や避難生活中の被災者を支えました

15日朝10時、市の担当者から奉仕団の委員長に炊き出しの要請があった。警察、消防、自衛隊など各地からのレスキュー隊に食事を提供するのだ。

死者・行方不明者23人を出した岩手・宮城内陸地震。震度6強の激しい揺れに襲われた宮城県栗原市では、山の崩落により「助の湯温泉」の旅館が飲み込まれていた。

え？これから炊き出し？昼食分として400人分！

「お願いです！まだ泥の中にか埋まってるんです！」

みんなも避難しているだろうし、集まれるかなー

連絡がとれない。急なお願いなのにありがたそうに訓練してきませんか。

でも、長期の活動になりそうだし、他の地区の団員にも協力をお願いする必要があります。

16日朝には10人の団員が参加した5人のメンバーの中には、

「お前も赤十字の団員か？」

「はい、そうです。男性の団員もいますよ。」

「おいが来てくたせ！」

奉仕団のみんな、自主的に動いてくれる！

救助活動はその後継続されたが、奉仕団の炊き出しは16日朝で終了。自衛隊に引き継がれ、17日からは胸の痛みがある地区の被災者ら約50人が身を寄せた「みちのく伝説館」での食事の支援も要請された。

近隣5つの奉仕団の協力も得た活動は、被災者が仮設住宅に移る7月20日まで継続。37日間の活動に参加した奉仕団員は延べ285人に及んだ。栗原市栗駒赤十字奉仕団には「平成21年度防災功労者防災担当大臣表彰」が贈られた。

「赤十字奉仕団 災害時炊き出しレシピ集」

ついに完成！
ハートちゃんのほっぺも落ちる!!

「レシピ集」に掲載されているのは、主食・副食・汁物・デザート4分野のバラエティーに富んだ和洋中の82メニュー。全国の109奉仕団から応募のあった205レシピの中から「被災者ニーズを満たしている」「自己完結ができて」「実災害での調理が可能」「どの奉仕団でもつくりやすい」などの項目をクリアした、えりすぐりの絶品炊き出し料理です。

災害状況を想定して考えた100食分レシピ

地震発生後3週間たっても続く避難所生活で提供されてきたのはレトルト食品ばかり。被災者にはストレスも溜まっているという状況を想定して、各レシピは考案されました。一食300円程度、100食分の昼食レシピには、ほっとする地元の味や、疲れの取れる甘いデザートまで被災者を気遣うアイデアが詰まっています。

ドライカレー (主菜)
年代問わず人気、炊き出し定番のカレーをひと工夫。野菜やシーチキンを入れたドライカレー。(群馬県支部)

ゴーヤ入り野菜たっぷり春雨サラダ (副菜)
食べなれた地元食材を使って。ビタミンも豊富。(沖縄県支部)

具だくさん米粉団子汁 (汁物)
アレルギーの方のため、小麦粉や卵を使わず、米粉を使用。(広島県支部)

ぶっかけおぼろ (デザート)
疲れた時には甘いおやつが喜ばれる。包装食袋を使って簡単に調理。材料は長期保存可能。(滋賀県支部)

炊き込みご飯

三重県支部 / 100人分 / 一人当たり150円

100人分ってこんな量!!

- 米を洗って30分おく
- にんじん、しいたけは小口切り、ごぼうはささがきにして水にさらす。ねぎは小口切り。
- とり肉も小さく切る。あれば酒につける。
- 合わせだし汁の材料を合わせておく。
- 炊飯器(3升炊きの場合)→米2升、合わせだし汁4.3ℓ、具(ねぎ以外)全体の1/5を入れてスイッチを入れる。
- 炊き上がったらねぎを混ぜ合わせる。15分ほどむらしておにぎりに。

材料
米...15kg
具 (その時に用意できるもので良い)
① にんじん...10本/しいたけ...15枚
ごぼう...7本/ネギ...2束/とり肉...1~1.5kg

合わせだし汁
水...15ℓ / 調味料(昆布・かつおだし) しょう油...1ℓ / おりん...1ℓ
酒...1ℓ

簡単チキンパスタ

家庭でも耐熱性ポリ袋で

耐熱性ポリ袋を使って、パスタとソースが同時に調理できます。

① 料理用耐熱ポリ袋を2枚用意し、A、Bをそれぞれ入れ、空気を抜いた状態で袋の上部をしっかり縛る。

② 鍋に湯を沸騰させ、1のA、Bのポリ袋を入れ、再び沸騰してからふたをして中火で10分加熱する。(スバゲティの表示ゆで時間+2分が目安)

③ Aの袋を開けて湯を捨て皿に盛り、Bのソースをかけて軽く絡め、お好みで塩コショウする。

材料(2人分)
A スバゲティ1束...100g (半分折る)
塩...小さじ1/2
水...380ml
サラダ油...大さじ1
B 焼き鳥串...1串 (ツナ缶、アサリの水煮缶でもOK!)
ピーマン...1/2個
玉ねぎ...1/4個
しめじ...1/3個
醤油...小さじ1

(静岡赤十字病院 栄養課考案レシピ <http://www.shizuoka-med.jrc.or.jp/section/department/nourishment-5.html>)



「震災時の経験を若い社員にも伝えたい」

ダイアナ株式会社 原宿店 阿井翠さん

ダイアナでは、お客さまへ「私たちは、忘れない。」プロジェクトのラベル付きペットボトルのお水をお渡しさせていただきました。私が接客したお客さまの中には、3.11の際の断水経験をお話くださる方もいらっしゃるなど、震災を振り返るきっかけになったと感じています。震災後、計画停電などの影響で照明を暗くしたり、営業時間を短縮した店舗もダイアナにはあります。震災後に入社した若い社員に、こうした経験を伝えていくことも大切だと思っています。



タクシー業界で評判になったステッカー

飛鳥交通株式会社 代表取締役社長 川野繁さん

5年がたつとはいえ、被災地の現状はまだまだ。忘れてならないのは当然です。今回、社員がバッジを着用し、グループ会社と東京無線の車両約6500台にステッカーを貼りました。自家用車にステッカーを貼った職員もいるなど積極的に取り組んでもらえてうれしかったですね。他社の社長さんからも取り組みについてお褒めの言葉をいただくなどタクシー業界では評判になりました。お客さまにも、「忘れない。」というメッセージを上げられたと思っています。

「災害時、地域から頼られるお店に」

東京トヨペット株式会社 新宿店店長 穂積盛司さん

従業員にバッジを渡す際、「3月11日の経験を思い出してみよう」と呼び掛けました。私自身は、渋滞に巻き込まれ帰宅が明け方になりましたが、こうした記憶を通じて震災を振り返ることが大切だと考えています。震災後、弊社は各店舗を一時避難所として使えるよう水や非常食の備蓄を進めました。また、当店では、プリウスのバッテリーを再利用した定置型蓄電システムも備えました。災害時も皆さまから頼られるお店を目指し、これからも頑張っていきます。



「震災と被災地を考える良い機会に」

株式会社ミツウロコバレッジ ショップ&レストラン事業部ショップ課 エリアマネージャー 飯島健さん

私どもは、弊社運営のコンビニエンスストアなどで「私たちは、忘れない。」プロジェクトのラベル付きペットボトルのお水をバッジや冊子と一緒にお客さまにお渡ししました。皆さまに喜んでいただけましたし、「忘れないことは大事ですよ」などの声も頂戴しています。被災地でのボランティア活動などに参加した経験がない私自身にとっても、今回のプロジェクトに関われたことは大変良い機会になりました。



全国の赤十字が 賛加企業が 「私たちは、忘れない。」 ~未来につなげる復興支援プロジェクト



東日本大震災から5年。日本赤十字社は「私たちは、忘れない。」を統一テーマに掲げるプロジェクトを3月1～31日に全国で実施しました。震災記憶の風化を防ぐとともに、助け合いと防災意識を醸成し、復興への思いを未来へつないでいくのが目的です。協力の呼び掛けに15社を超える企業からの賛同をいただき、各参加企業では従業員がプロジェクトのバッジを着用したり、ステッカーを活用したPRを展開。また、日赤の各支部や施設では、11日を中心にさまざまな企画の震災復興・防災イベントに取り組みました。



「従業員から『身が引き締まる』の声」

タリーズコーヒー 上野の森さくらテラス店 シニアストアマネージャー 山本岳広さん

東日本大震災は個人としても心に刻んでおきたいと日頃から感じていましたから、タリーズコーヒーとしての「私たちは、忘れない。」プロジェクトへの参加はうれしかったですね。パートさんからも「大事なことですね」「身が引き締まる思い」などの声が聞かれました。店で開いているコーヒースクールのお客さまからバッジに関する質問をいただいた際には、プロジェクトの趣旨と弊社の取り組みを説明。3.11に関する対話を広げるきっかけにもなったと思います。

各地で取り組んだイベントの一部を紹介！



神奈川

神奈川県内の小中高・特別支援学校16校(青少年赤十字加盟校)で行われた防災教育授業では、約2000人の児童・生徒が避難時に必要な事を考えたり、非常食作りなどに挑戦。



鳥取

鳥取県支部と県による「集い」では、被災3県から預かった種子による苗木を植え替え。平井伸治支部長(県知事)や、救護班として被災地で活動した看護師が小学生と一緒に作業。



全国

日赤本社職員が3月8日、株式会社ウェザーニューズの番組に出演し、宮城、岩手、福島に届ける応援フラッグをはじめとした「私たちは、忘れない。」プロジェクトを紹介しました。



広島

広島県支部が2月21日に開催した赤十字防災ボランティア実践研修会。約200人の参加者が東日本大震災の救護活動体験の講演に耳を傾けるとともに、被災3県への寄せ書きや炊き出し、応急手当の訓練を実施しました。



岡山

東日本大震災チャリティラン&ウォーク(3月6日、市民団体主催)に、岡山県支部職員が救護服姿で参加し、支援を呼び掛けました。ランナーには、ステッカーなども提供。



石川

石川県支部は3月12、13日、金沢駅の地下広場で、被災者からのメッセージなどを展示。「被災地への応援メッセージ」の呼び掛けも行われ、来場者170人が協力しました。



福井

被災地訪問研修として35人の団員が石巻市の追悼式に参列した福井県赤十字奉仕団。追悼式前には児童74人が犠牲となった大川小学校を訪れ、祈りを捧げました。



埼玉

さいたま赤十字病院で開催された東日本大震災復興支援オペラコンサート。ポカールグループ「アウローラ」が復興への思いを込めた歌声を響かせました。



大分

大分県支部による非常炊き出しの体験イベントでは、参加者から「この体験を通じ、少しでもあの日の気持ちを思い出せれば」などの声が寄せられました。



奈良

JR奈良駅前広場では奉仕団などボランティアによる非常食の提供や復興パネル展示などを実施。青少年赤十字メンバーによる募金活動も行われました。



被災者の痛みを心に留め、引きずっていきたくない

ジャーナリスト 由井りょう子

「病気だけを診る病院、医師だったなら、あの時の対応は無理だったはず。石巻赤十字病院で働く人たちのすごさを改めて感じました」と語るのはジャーナリストの由井りょう子さん。震災の年に著した『石巻赤十字病院の100日間』の文庫化にあたり被災地を再訪。関係者を再取材しました。

「石巻赤十字病院の皆さんはその後も、各地の災害での救護活動に参加して、自分たちの問題として考え行動、検証し、フィードバックするなど頑張っていました」と取材を振り返る一方、日本全体でのこの5年間の「震災記憶の風化」を感じているといいます。「次々に再稼働する原発がその象徴。仮設住宅で暮らす高齢者が抱える問題も深刻です。被災地が本当に復興し、被災された方の心が真に癒えるときまで、私は、亡くなられた方や被災された方の痛みを他人事とせず、心に留め、引きずっていきたくないと思います」

『石巻赤十字病院の100日間【増補版】』



ほぼすべての医療機関が壊滅状況に陥った石巻圏内で、唯一機能を維持した石巻赤十字病院。“野戦病院”化した院内で医師や看護師をはじめとする病院スタッフが、何を考え、どう行動したのか。50人を超える関係者インタビューをもとに再現したドキュメントです。行政がマヒする中、全国から集まる救護班やDMAT(災害派遣医療チーム)などを合同救護チームにまとめあげた経験など、災害医療のモデルケースになるといわれるさまざまな取り組みが丁寧に描かれています。(小学館文庫 定価600円+税)

お詫と訂正

赤十字NEWS第910号の5面 東日本大震災復興支援事業の医療支援の文中で、「災害医療総合センター」を石巻赤十字病院内に整備しました。」と記載しましたが、正しくは「災害医療研修センター」です。訂正お詫び申し上げます。

Voice & プレゼント

Voice

赤十字NEWSにお寄せいただきました読者の皆さまの声をお届けします。

東日本には何度か通いましたが、今動いていないのが心苦しいところです。「私たちは、忘れない。」本当にそのとおり。せめてそれだけは失いたくないことです。いつか、再びお役に立てればと願っているところです。

— 太田明夫さん (島根県)

シリア他中東の内戦と難民のことが気になっています。人道問題がもっと広く知られ、少しでも多くの人々が助けられることを願います。

— 高藤史憲さん (三重県)

プレゼント

上記で紹介いたしました「石巻赤十字病院の100日間」由井りょう子著を5名様にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

- ①お名前 (匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字NEWS4月号を手にした場所 (例/献血ルーム)
- ⑥4月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか? (いくつでも)
 - Ⓐ 今月の出会い Ⓑ 杉並区立三谷小学校で防災授業実施
 - Ⓒ 5年ぶりに「蘇生ガイドライン」が改訂
 - Ⓓ 第4回赤十字原子力災害セミナー Ⓔ 健康豆知識 睡眠時無呼吸症候群
 - Ⓕ 平成28年度 日本赤十字社の予算概要
 - Ⓖ 特集 美味しい!温かい!赤十字奉仕団の十八番 炊き出しは「食」を通じた災害救護活動です
 - Ⓗ 全国の赤十字が 賛加企業が「私たちは、忘れない。」 ① エリアニュース
 - ② 「石巻赤十字病院の100日間【増補版】」 ③ Voice&プレゼント
 - ④ ネパール地震災害復興支援 ⑤ 先人たちの語る赤十字
 - ⑦ 赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice (読者の声) への投稿もお待ちしています。

応募先 ● 郵 送 / 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS4月号プレゼント係 FAX / 03-6679-0785 メール / koho@jrc.or.jp (件名「赤十字NEWS4月号プレゼント係」)

応募締切 ● 4月25日(月)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

いのちの大切さを伝える「いのちの講座」

岐阜県

高山赤十字病院は3月2日、高山市立江名子小学校で「いのちの講座」を開催しました。同講座は、いのちの大切さと性に対する健全な価値観の育成などを目的に平成3年から続けているもの。平成27年度は飛騨地域の小学校から高校までの7校で開催しました。



産道体験などを通じ子どもたちは、周囲の愛情を受けて誕生してきたことを学びます

3年生児童とその保護者、約90人が参加した江名子小学校の講座では、講師を務める助産師が、おなかの中の胎児の成長や赤ちゃんの誕生を待ち望む家族の様子をスライドなどで説明。赤ちゃんと同じ大きさの人形を抱いたり、産道を模したトンネルを通る産道体験をした子どもたちからは、「自分を大切にし、そして周りの人も大切にしていきたい」などの感想が寄せられました。

3団体の防災教育実践が内閣府から表彰

山口県

山口県支部と下関地方気象台、日本気象予報士会西部支部の3団体でつくる「いのちを守る防災教育を推進する会」が内閣府主催の防災教育チャレンジプラン活動報告会(2月20日、都内)で「防災教育特別賞」を受賞しました。



近年、山口県内では大雨災害が多発。防災教育の充実が急務となっています

「いのちを守る防災教育を推進する会」は3団体により昨年1月に結成。大雨災害からいのちを守るためのワークショップを県内各地でこれまでに22回開催し、気象の専門家以外の学校教員が防災教育の授業を実践できるよう、マニュアルや資料づくりなども進めてきました。防災教育特別賞はこうした実践が評価されたもの。平成28年度は、救急法や炊き出しを盛り込んだ総合的なプログラムの展開を予定しています。

化学兵器テロに備え病院で除染訓練

沖縄県

沖縄赤十字病院は2月15、16日、化学物質を使った爆発テロが那覇市内の野球場で発生したとの想定の下、「NBC災害*除染セット取扱・運用訓練」を実施しました。



化学物質から救護員自らの身を守るため、救護の際にも防護服の着用が欠かせません

現場での除染を受けずに病院を訪れる傷病者の受け入れ態勢を整えるため、資機材の設置、人員の配置、導線の確認などを行ったほか、除染の訓練も行いました。

* NBC災害=核・生物・化学物質による特殊災害

苦しむ人たちに寄り添う看護師への第一歩

広島県

日本赤十字広島看護大学で3月12日、学位授与式が行われ、看護学部生149人、大学院生9人が卒業しました。卒業生の中には、東日本大震災をきっかけに、看護の道を志した学生もいます。その一人、梶山明日香さんは卒業生代表の答辞で「赤十字の救護員を見て、赤十字の一員として人を救いたいと思いました。4年間の学びを糧に、専門職として救護活動に参加できる第一歩を踏み出します」と語りました。



卒業生には、「苦しむ人たちに寄り添い、思いやりをもった看護師として活躍してほしい」とのエールが贈られました

笑顔もつくれた「わくわく工作ランド」

鳥取県

鳥取県青年(学生)赤十字奉仕団連絡協議会は2月28日、東日本大震災により鳥取県内に避難している子ども連れ世帯を対象に、復興支援イベント「わくわく工作ランド」を開催。約350人の避難者らが参加しました。



団員たちが試行錯誤を重ねた工作コーナーは子どもたちの笑顔もつくりました

イベントは工作コーナーを軸にレクリエーションやちびっこコスプレ、救急法体験コーナーを実施。参加者からは「すばらしい企画でした。また来たいです」などの感想が寄せられました。

WORLD NEWS



ネパール地震災害復興支援 粗末なテント校舎で勉強する子どもたち 日赤が学校再建に向け現地調査

昨年4月、8800人を超える死者を出したネパール地震。復興に向けて日本赤十字社は、最も被害が大きかった地域の一つシンドパルチョーク郡で住宅や学校の再建、地域防災などの支援を予定しています。今年3月には、被災した小学校4校を日赤職員が訪問。教師や児童の聞き取り調査を行いました。

被災地に建てられていた学校の多くが石造り。大きな揺れにひとたまりもなく、ほとんどの校舎が全半壊の被害を受けました。授業の教材や子どもたちの使う机・椅子もがれきの中に埋まってしまったといいます。

各学校では地元住民や支援グループの協力を得て、トタンや竹などを使った仮設校舎を設置しましたが、地滑りにより校舎が建っていた場所が使えなくなり、仮設校舎の設置にさえ苦労したサトカニヤ小学校のようなケースもあります。

同校の校長ナヌ・ブラジャパティさんは「住宅地の一角を借りて、テント2張で授業をしています。夏の暑さや冬の寒さが厳しいです。今、地域の方から譲り受けた土地に、仮設校舎を建てているところです」と話します。

心にも深い傷を負った子どもたち

震災後、学校の多くは1カ月程で授業を再開しましたが、環境の悪い仮設校舎での生活に体調を崩す児童も少なくありませんでした。

バルジョティ小学校では夏場の暑さにおう吐する児童も。野外での授業に切り替えましたが、校長のバブラム・サティアルさんは「学校は丘の上。強い風にさらされる生徒の安全が常に気になっています」と心配します。別の学校では、夏の暑さを避けるため、午前

中で授業を切り上げざるを得なかったといます。

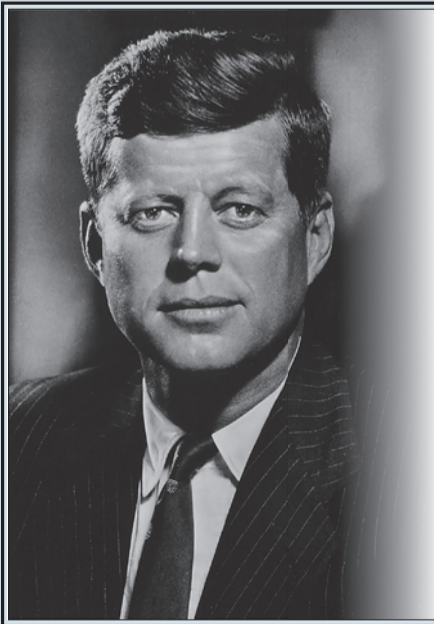
一方、震災は子どもたちの心にも深い傷を残しました。学校再開当初は「親と離れたくない」と学校へ行きたがらなかったり、飛行機などの音にさえ怖がる子どもたちが珍しくありませんでした。不安から、落ち着いて勉強する余裕を失っていたのです。

震災から1年近くがたち、子どもたちは落ち着きを取り戻してきた面もありますが、地震の恐怖は消えたわけではありません。パンチャカニヤ小学校の校長デヴァキ・パンディット・カドカさんは「地震と聞くと今でも怖がり、強い反応を示す児童が多いです」と表情を曇らせました。

皆さまから日赤に寄せられた「2015年ネパール地震救援金」は約20億円。そのうち、これまでに約4億円が医療班の派遣や救援物資の配布などの緊急救援活動に使われました。しかしその後、ネパールの新憲法が公布されたことによる混乱から、インドとの国境が封鎖され燃料危機が起きたことや、ネパール政府の全体復興計画の遅延などから復興全体に遅れが生じています。こうした困難の中、日赤は国際赤十字やネパール赤十字社と綿密な連携を図りつつ、今回の調査結果などを踏まえながら学校再建や生活再建に向けた復興支援事業を進めていきます。



1 学校の再建を心待ちにする子どもたち
2 学校関係者に聞き取り調査をする日赤の現地スタッフ
3 トタンや竹で作られた仮設校舎
4 テントで授業を行うバルジョティ小学校



アンリー・デュナンが提唱してはじまった赤十字運動。人道的価値を希求するその理念が人種や宗教などの違いを越えて世界中の人びとの心を動かし、広まりました。

歴史に名を残した人たちも例外ではなく、その言葉は私たちに勇気を与えてくれます。

今回から3回にわたって「先人たちの語る赤十字」を紹介します。1回目はケネディ大統領です。

赤十字は、人びとが本当に必要としている時に、絶えまぬ活力と信頼に足る援助を与えてくれるシンボルである。人間の、人類は兄弟という変わらぬ願いの象徴である。

先人たちの語る赤十字

(赤十字理念普及ミニシリーズ)



ジョン・F・ケネディ
(アメリカ合衆国第35代大統領)

(出典：日本赤十字社創立125周年記念展)